

タイトル

橋本 燎 (指導教員 井上 優良)

令和 3 年 1 月 17 日

1. 卒業研究抄録のフォーマット指針

以下, 卒業研究抄録用スタイルファイルを用いた抄録フォーマットの指針について述べるので, これに従って原稿を用意頂きたい. \LaTeX を用いた一般的な文章作成技術については, [4], [5] 等を参考にされたい.

2. 抄録の構成

抄録の \LaTeX ソースコードの基本的な構成が次のようになる.

```
\documentclass[summary]{nitocs}.
\begin{document}
\title{表題 (和文)}
\author{情報 太郎}{Joho Taro}
\advisor{処理 花子}{Shori Hanako}
\date{平成 27 年 12 月 1 日}
\begin{jkeyword}
<キーワード 1>, <キーワード 2>, ...
\end{jkeyword}
\maketitle
\section{第 1 節の表題}
.....
<本文>
.....
\begin{thebibliography}{99}%9 or 99
\bibitem{1}
\bibitem{2}
\end{thebibliography}

\end{document}
```

3. 本文

3.1 見出し

節や小節の見出しには \section , \subsection , \subsubsection , \paragraph といったコマンドを使用する.

3.2 行送り

2 段組を採用しており, 左右の段で行の基準線の位置が一致することを原則としている. また, 節見出しなど, 行の間隔を他よりたくさんとった方が読みやすい場所では,

この原則を守るようにスタイルファイルが自動的にスペースを挿入する. したがって本文中では \vspace や \vskip を用いたスペースの調整を行なわないようにすること.

3.3 句読点

句点には全角の「.」, 読点には全角の「,」を用いる. ただし英文中や数式中で「.」や「,」を使う場合には, 半角文字を使う.「。」や「,」は使わない.

3.4 全角文字と半角文字

全角文字と半角文字の両方にある文字は次のように使い分ける.

- (1) 括弧は全角の「(」と「)」を用いる. 但し, 英文の概要, 図表見出し, 書誌データでは半角の「(」と「)」を用いる.
- (2) 英数字, 空白, 記号類は半角文字を用いる. ただし, 句読点に関しては, 前項で述べたような例外がある.
- (3) カタカナは全角文字を用いる.
- (4) 引用符では開きと閉じを区別する. 開きには「『」を用い, 閉じには「』」を用いる.

3.5 箇条書

箇条書に関する形式を特に定めていない. 場合に応じて標準的な enumerate , itemize , description の環境を用いてよい.

4. 数式

4.1 本文中の数式

本文中の数式は $\text{\$}$ と $\text{\$}$, \backslash (と \backslash), あるいは math 環境のいずれで囲んでもよい.

4.2 別組の数式

別組数式 (displayed math) については $\text{\$}$ と $\text{\$}$ は使用せずに, \[と \] で囲むか, displaymath , equation , eqnarray のいずれかの環境を用いる. これらは

$$\Delta_l = \sum_{i=l|1}^L \delta_{pi} \quad (1)$$

のように, センタリングではなく固定字下げで数式を出力し, かつ背が高い数式による行送りの乱れを吸収する機能がある.

```
\begin{figure}[tb]
<図本体の指定>
\caption{<和文見出し>}
\label{...}
\end{figure}
```

図 1 1 段幅の図

表 1 表の例

	column1	column2	column3
row1	item 1,1	item 2,1	—
row2	—	item 2,2	item 3,2
row3	item 1,3	item 2,3	item 3,3
row4	item 1,4	item 2,4	item 3,4

4.3 eqnarray 環境

互いに関連する別組の数式が 2 行以上連続して現れる場合には、単に `\[と]`、あるいは `\begin{equation}` と `\end{equation}` で囲った数式を書き並べるのではなく、`\begin{eqnarray}` と `\end{eqnarray}` を使って、等号（あるいは不等号）の位置で縦揃えを行なった方が読みやすい。

5. 図

1 段の幅におさまる図は、図 1 の形式で指定する。位置の指定に `h` は使わない。また、図の下に和文の見出しを、`\caption` で指定する。文字数が多い見出しは自動的に改行して最大幅の行を基準にセンタリングするが、見出しが 2 行になる場合には適宜 `\\` を挿入して改行したほうが良い結果となることがしばしばある（図 1 の英文見出しを参照）。図の参照は `\figref{<ラベル>}` を用いて行なう。

図の中身では本文と違い、どのような大きさのフォントを使用しても構わない。また図の中身として、`encapsulate` された PostScript ファイル（いわゆる EPS ファイル）を読み込むこともできる。読み込みのためには、プリアンブルで

```
\usepackage{graphicx}
```

を行った上で、`\includegraphics` コマンドを図を埋め込む箇所に置き、その引数にファイル名（など）を指定する。

6. 表

表の罫線はなるべく少なくするのが、仕上がりをすっきりさせるコツである。罫線をつける場合には、一番上の罫線には二重線を使い、左右の端には縦の罫線をつけない（表 1）。表中のフォントサイズのデフォルトは `\footnotesize` である。

また、表の上に和文の見出しを、`\caption` で指定する。表の参照は `\tabref{<ラベル>}` を用いて行なう。

7. 参考文献

本文中で参考文献を参照する場合には `\cite` を使用する。

参照されたラベルは自動的にソートされ、`[]` でそれぞれ区切られる。

文献 `\cite{companion,okumura}` は \LaTeX の総合的な解説書である。

と書くと；

文献 [4], [5] は \LaTeX の総合的な解説書である。が得られる。

参考文献

- [1] Lamport, L.: *A Document Preparation System \LaTeX User's Guide & Reference Manual*, Addison Wesley, Reading, Massachusetts (1986). (Cooke, E., et al. 訳：文書処理システム \LaTeX ，アスキー出版局 (1990))。
- [2] 伊藤和人： \LaTeX トータルガイド，秀和システムトレーニング (1991)。
- [3] 野寺隆志：楽々 \LaTeX ，共立出版 (1990)。
- [4] 奥村晴彦：改訂第 5 版 \LaTeX 2_ε 美文書作成入門，技術評論社 (2010)。
- [5] Goossens, M., Mittelbach, F. and Samarin, A.: *The \LaTeX Companion*, Addison Wesley, Reading, Massachusetts (1993)。
- [6] 木下是雄：理科系の作文技術，中公新書 (1981)。
- [7] Strunk W. J. and White E.B.: *The Elements of Style, Forth Edition*, Longman (2000)。
- [8] Blake G. and Bly R.W.: *The Elements of Technical Writing*, Longman (1993)。
- [9] Higham N.J.: *Handbook of Writing for the Mathematical Sciences*, SIAM (1998)。